樹木だより

おにぐるみの冬芽

秋深まって、末枯れ葉が落ちると、オニグルミの太い小枝（１年生枝）には、大きなＴ字形ないし猿面形の葉痕（葉印）が現われる。未発達の葉が多数集まった冬芽は、密毛につつまれて厳しい冬を越すのである。オニグルミの冬芽は、特に芽鱗が発達しないので、裸芽とよばれる。春になると、小さくたたまれていた複葉が展開して、にぎわう芽吹きの時となる。しかし、外側の、寒気にさらされていた葉は、内側の葉を守る芽鱗の役を果して、未発達のまま落ちてしまう。また、大きい頂芽が発達するのに、小さい側芽は芽を吹かないで終る場合が多い。オニグルミの小枝は、一度でも見たら、誰にでも覚えられる。北国の最もポピュラーなものであり、葉のある夏よりも樹種を決めやすいくらいである。

（防災林科　斎藤新一郎）